

花の臉

Saw (さう)

深夜のコンビニは光の届かない海底に似ている。其処に集まってくる客は深海魚のごとき暗い眼をしており、ジャンク・フードと情報を買いもとめると、ふたたび夜の闇に溶けてゆく。

日付の変わる前に最後の客を捌くと店にはひとまずの沈黙がおとずれた。やかましかった有線も曲と曲の繋ぎだからか鳴りをひそめている。

密閉された静謐を破るのは、いつも、彼女だった。

彼女は定刻通りに自動扉からすべりこみ、店内を一周していつものチョコドリンクを手にレジへやってきた。緑色のテープを貼り、ストローをつけて渡す。

彼女はいわば深夜の常連であった。名前は知らない。レジの業務以外でことばを交わしたことがすらなかった。

「* * 円になります」

「ごめんなさい、すぐ出しますから」

彼女は足もとに鞆を投げだして探しものをはじめた。やはりというか、鞆の中は雑然としていた。其処をやたらと引つ掻きまわすものだから更に手がつけれなくなっている。

それはいつものことで、私は無性に苛立った。彼女の進歩のなさといまだ耐性のつかない自身の両方にある。そっと彼女を見ると、思いきり下を向いているせいで普段は結びあげた髪にかくれた項が顔になっただけ。

そのほとんど陽に焼けていない白い肌に繊細な意匠が

ほどこされている。エフィラ地区の管轄下におかれた者を識別する、か細い四肢をひろげたくらげの刺青だった。

「ありました、はい」

彼女は勢いよく顔をあげると、銀貨を一枚差し出した。

「財布ですぐ底のほうに潜っちゃうんですよね」

わらいながら、銀貨をつまんだ幼い指で鞆からはみ出した分厚い茶封筒を押しこむ。

その場で紙バックを開封し、ストローを挿した。

「ありがとうございます」

今夜も彼女の華奢な背中を見送って終わるのだろう。

そう思っていた。しかしその思念は不意に流れた旋律によつてかき消された。

——歌姫リゲルの、「花の臉」。

基本的に大量消費される流行歌しか扱わない有線からは絶対流れることのないフレーズが、せまい店内を密やかに満たした。

「また呼び出し、」

彼女が不機嫌そうに携帯端末をひらく。くもっていたリゲルの歌声がわずかに鮮明になった。

今ここで声をかければ、彼女と彼女を呼び出している誰かとの通話をさえぎることになるだろう。けれど、私は言わなければと強く思った。だから、口をひらいた。

「それ、『花の臉』だよ。リゲルの」

端末はリゲルとともに彼女を呼びつづけている。

私は祈るような気持ちで返事を待った。いつも彼女にたいして抱く一種の気ぜわしさはなかった。

「店員さん、リゲルを知っているんですか」

おおきな眼を睜り、彼女はぼつりと呟いた。

それは「花の臉」とおなじく、あまりにもおだやかな囁きだった。

「サカキは吉夢をもたらす樹なんです」

やわらかな膝に頭をあずけていると、頭上から彼女の

——莉玖の声が降ってきた。

「よく知っているね」

「お姉ちゃんが教えてくれたんです」

莉玖のいう姉とは血縁上のそれではない。彼女と同様にエフィラ地区が取り仕切る娼館に籍を置く職業上の「姉貴分」である。

莉玖は紙幣でばんばんになった茶封筒を持っていたり、端末でつながっているのは顧客のみだったりすることを除けばごく普通の少女だった。それどころか、年齢の割に無垢ですらあった。

彼女の視線は今、テーブルに置いてあったフライヤー

にそそがれていた。

「これ、リゲルでしょう」

「そうだよ」

身体を起こして紙切れを彼女の手握らせる。セピア地に黒の印字は、リゲルが新譜をひっさげたツアー中であることを表していた。

「いいなあ。わたし、リゲルのライブって一度も行ったことないんです」

「どうして」

「お仕事以外じゃ外出許可が下りないから」

莉玖は仕事で地区外に出たときの合間を縫って、私の部屋に来るようになった。私が学校に行っていたり、店に出でいたりするときは部屋の前の踊り場で遊んでいるようだった。

「仕事なら地区外に出られるんだ」

「はい。お客さんに同行するという形なら、指定されたおうちやホテル以外に行ってもいいって」

「それじゃ、いつか一緒に行こうよ、ライブ」

「どうやって」

「だからその方法だよ。今度、私が客としてきみを呼ばばいい」

彼女はうれしそうな顔をしたあと、わずかに顔をくもらせた。私はその訳を訊こうと思ったが、彼女の端末が鳴ったのでそれは叶わなかった。

「行くの、」

「はい。お仕事ですから」

端末と鞆を手に彼女が部屋を出ていった。「花の臉」はいつも、静謐に傷痕をのこしてゆく。

次に莉玖が姿をあらわしたのは、一週間後の夜だった。パイプ椅子に座って本を読んでいると、視界のはしに、チョコドリンクと銀貨をとらえた。

顔をあげるとカウンターに彼女がいた。

「こんばんは」

「今、仕事あがり、」

「そんなところですよ」

コードを読み取り、緑色のシールを貼ってストローと一緒に渡す。緩慢にストローのビニールを破りながら、莉玖がつづけた。

「あとのくらいでお仕事終わりですか」

「十五分くらいかな」

「一緒に帰ってもいい、」

「かまわないけど、怒られたりしないかい」

「大丈夫です。これ飲みながら外で待ってますね」

中で待っていればいいのにという申し出を振り切り、莉玖は自動扉にむかって走っていった。

それから私が業務をこなす間、彼女はガラス越しに手を振ったり、両手でバランスをとりながら駐車場の車止めの上を歩いたりした。

誰かが待っているという時間がこんなにやさしいものだ、私ははじめて知った。

店を出るころにはすっかり夜が深まっていた。空には上弦の月がさびしそうに貼りついている。

「公園に寄ってもかまいませんか」

莉玖は私の右腕に両腕を絡ませて、本当にうれしそうに歩いた。

歩きながらとりとめのない話をした。焼き菓子の上に乗せてある罌粟の実は加熱してあるから依存性はないとか、ひるがおの花を踏みつけにすると天気雨が降るとかという話題が時間を埋めた。

公園には子どもの好みそうな遊具がいくつかと、豊かに葉を上げらせた立派なサカキの樹があった。

「もつとそばに来て」

ふたりで樹に近づくと、太い根に横たわるようにしてシャベルとおおきな麻袋が置いてあった。

「これを埋めてほしいんです」

月明かりはこぼれているのに、サカキの翳にかくれて

莉玖の表情がわからない。中身はよほどのものなのか、口から使いふるした毛布が見えていた。

口を縛っている紐を解こうとすると、莉玖のするどい声が飛んできた。いつもの少し鼻にかかるおっとりした話し方とかけ離れており、私は思わず手をひっこめた。

「ごめんなさい、あの、動物の遺骸だから見ないほうがいいと思って」

「遺骸、」

「はい。結構おおきな動物だったみたいです」

莉玖がそれ以上なにも言わなかったので、私は沈黙を守ったまま穴を掘り、麻袋を放りこんだ。

「これ、きみがひとりで此処まで運んだのか」

掻き出した土を盛りながら訊いてみても、彼女の態度は頑なだった。ただ、はぐらかすようにわらった。

その夜、夢を見た。色のない夢だった。

天井の高い部屋に私と莉玖がいて、小柄な彼女が外を見たいと嵌め殺しの窓を指した。

抱きあげた身体は軽かった。

私はなぜか、自分から大切なものをひとつ切り取って神様にあげれば外に出られることを知っていた。

そのことを教えてやると莉玖は言った。わたしは一緒に

に行けません。そう言った。

「どうして」

「最初からわたしには何もないからです」

窓の外ではありとあらゆるものの生滅が早送りで繰り返されていった。

またたきのあいだに

なんどもしんで

なんどもうまれかわって

血にまみれたナイフが落ちた。

時間だからと莉玖が急ぎ立てた。

わたしが切り取ったものは、きつと――。

二日間の休日をはさみ、店へ出た。憂鬱な週はじめも、穴掘りで爪のなかに入りこんで取れない土も、たいした苦痛ではなかった。

私たちには頭上で輝きつづける星がある。

リゲルという名の、青い星だ。

商品棚の整理をしていると背後で自動扉の開く気配がした。いつもの時間である。レジに戻ろうと振りかえると眼前にいたのは莉玖ではなかった。

人工的な金髪で、おおきくはだけたデコルテにくらげの意匠を彫りこんだ少女が立っていた。莉玖より年上に見える。

少女は私の顔を見るなり、リクが行方不明なんですとまくしたてた。それはほとんど涙声であり、私は彼女が莉玖の話していた「お姉ちゃん」だと直感した。

「リクと最後に逢っていたのは恐らくあなたなんです。娼館にはもちろん帰っていません。端末もつながらなくて」

私はしばらく少女の話に耳をかたむけた後、彼女を帰した。心あたりがないわけではない。

あるとすればあの公園である。不安を煽るように土のせいで毒の入った爪がじくじくと痛んだ。

週末を待ち、私はひとり公園に向かった。

白昼だというのに風はなく、子どもの甲高いはしやぎ声も聞こえない。

あのときは暗くてわからなかったが、莉玖とくつつきながら歩いた道は簡単に舗装されただけのさびしい遊歩道だった。彼女と交わした会話を思い出そうとしても、肝心の記憶はダイレイをかけたように歪んでしまう。

焼き菓子の上にまぶした罌粟の実は——。
ひるがおの花を踏みつけにすると——。

見覚えのある場所に出た。サカキの大樹は、変わらず其処に根を下ろしていた。

麻袋を埋めた箇所を手で掘り返すと、私が蹂躪した土はまだやわらかかった。今まで降りつづけた雨を吸ったような、甘くやさしい匂いが立ちのぼっていた。

爪の鈍痛は、加速してゆく。

やがて、麻のばさばさとした感触が指先に触れた。

私はふるえる手で紐を解き、上のあたりを無理やりに裂いた。

はたして麻袋のなかには莉玖が入っていた。

しずかに伏せられた臉は花卉のようにあわく色づき、眠っているようだった。

朽ちはじめた唇を、そつとふさぐ。

そばで土にまみれて転がっていた端末が唄いだす。

「花の臉」は妙なる言祝ぎとなつて、私の上に、彼女の上にふりそそいだ。

「サカキは吉夢をもたらす樹なんです」

かつて言っていたとおり、彼女は樹の下で甘い夢を見つづけていた。それだけで、よかった。

——
おやすみなさい。